



ホーム
ページ
QRコード



ツイッター
QRコード

2022/4/1 No.89

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

創立六〇周年を迎えるにあたって

理事長 木下 宣世



歩みの上に神さまの守りと導きが豊かにあるよう祈ります。

さて、今年には私共の法人にとって特別な年度となります、来る五月二十五日が法人設立六〇周年の日となるからです。この事を記念して五月二十一日(土)に創立六〇周年記念式典を行うこととなりました。同時に記念誌も発行され、公募した中から選ばれた望みの門賛歌も披露されます。現在、実行委員会を中心に準備が進められています、これらの諸事業が無事にまた意義深く遂行されることを願っている次第です。

ところでこのような記念事業を行うのは何のためでしょうか。まず考えられるのは六〇年にわたる歩みをなしてこれたことを喜び祝い、感謝するということがあるでしょう。

しかし、それだけではなく、これまでの歴史を振り返り、先人たちが残してくれた遺産に目を止め、今後私共が何を大切に、何を課題として歩んでいくのかということ明らかにすることが大切ではないかと思えます。

今回、記念事業を準備するにあたり、準備委員会や実行委員会の議を経て「地域と共に歩む」愛と奉仕の灯を掲げて」という主題を定めたことは以前報告した通りです。

この主題は六〇周年を祝う私共の基本姿勢であり、今後の当法人の在り方を指し示す言葉でもあります。

顧みれば、「望みの門学園」がこの地に誕生したのも当時の富津町がその事を認め、受け入れてくださったからです。その後も富津市は当法人に対し様々な助けを与えて下さいました。また近隣の方々も私共の事業を理解し、色々と便宜を計り、協力して下さいました。

このような地域の支援があったからこそ私共は今日まで働きを続けていくことができたのです。そのことを憶え、感謝し、今後も地域のために、そして地域と共に歩もうとの思いを込めて立てられたのがこの主題の趣旨であります。

それと同時に「愛と奉仕の灯を掲げて」という言葉を副えました。これは戦後混乱した社会にあって苦しむ女性たちを救済するために同じ敗戦国でありながらはるばる日本に来てくださったドイツの婦人宣教師の方々の精神を表した言葉です。

そしてこの精神はイエス・キリストが教え、また自ら実践して下さった生き方でもあり

ます。イエスさまは「わたしは仕えられるためではなく仕えるために来た」と仰って多くの人々に愛を注いでくださいました。私共はこの言葉にならない「愛をもって仕える」を motto に働いてきました。この在り方をこれからも最も大切な事として守り続けていかなければならないと考えております。皆様の御支援をよろしくお願い申し上げます。

ハンブルクへ、母の死



常務理事 井本 義孝

詩編126編「涙とともに種を蒔く人は喜びの歌と共に刈り入れる。種

の袋を背負い涙と共に出て行った人は束ねた穂を背負い、喜びの歌を歌いながら帰ってくる。」
街路樹のカスタニエンが黄色くなりやがてちらほら落ちてくるころ、リンデンホフで一緒にだった D. Wock 牧師からお手紙をいただいた。それにはハンブルクにドイツバプテストの神学校がありそこで学んだらどうかというお誘いの内容であり、また市内にはバプテスト教会立の総合病院があるのでアルバイトも可能で Wock 家に滞在してはどうかという大変親切な内容であった。ベータール神学大学には入学して二か月足らずであったが退

学を決意した。Wock 家はハンブルク中央駅から市電でおよそ三十分程度の二階家であった。

Wock 牧師は前記総合病院で牧師として奉職されていた。

ご家族はドリス夫人、小学生のミカエルとアンドリアの四大家族でバプテスト（プロテスタントの一派、宗教革命当時カソリックとプロテスタント両方から圧迫された）という同信のせい、何とも言えない暖かい家族の一員として受け入れてくださり、五十二年後の今日まで親戚付き合いをしている。ミカエルは医師として赤十字で働き、夫人はカウンセラーとして二人のお嬢さんの四大家族、アンドリアは福祉施設でマルチンと結婚し一男二女の子供はベルリン大学を卒業し二人の娘は卒業と同時に結婚いまは孫二人の立派なおばあちゃんである。半世紀を経過し若い二人のはにかんだ顔を思い出し、時の流れと人の出会いの陰に見得ざる神の導きを思う。Wock 家では居候を決め込みながらバプテスト神学校に入学し、相変わらず言葉は不自由ながら若い学友たちと何かと語り合って同信の喜びを感じたものである。今、慚愧に堪えぬ思いがするのは当時の皆さんと交流がないことであり、身から出た錆であることを恥ずかしく残念に思う。

神学校での生活に大分慣れてきて間もなく

夏休みに入るのもまじかとなった七月一日の早朝、ドリス夫人のドアのノックと義孝、電報、との声で目を覚ます。朝四時頃であった。

電文を見れば、—HAHASISU=NORIKO—とあり、咄嗟に家内の母が、と思った。五十二年後のいま思っても不思議に思う。人間、特に自分はなんと身勝手な自分中心的な奴だろうかと、今もつくづくと思う。何言ってるの！あなたのお母さん、と聞いて動転した。何もかもわからなくなりただ涙のみ溢れた。三日間飲まず食わずにいた。親不孝な自分をひたすら詫びた。今更帰っても母に会うことはできない。このまま初志貫徹しスイスのリシュリコンでのバプテストの歴史研究をやるべきか。煩悶し神に祈った。結果、自分は長男でありいつまでも家内に三歳の義則、老いたる父を任せるのはあまりに身勝手であると、今更のように思い帰国を決意した。それにしても自分はキリストの伝道者としてこれから歩むため、ドイツに導かれベータールと神学校に学ばせていただいたことに思いを巡らせたと、このまま帰国することは何か神様に申し訳ない思いがした。

考え祈った末、少しでもイスラム諸国を瞥見し帰国する事とし、すべて陸路で、北部ドイツから南下し、トルコ、イラン、他ユーラシア大陸経由で帰国する決意をした。

未了

東京望みの門 自立援助ホーム マナの家

デザート




調理員 舌間 允子

デザートとは、「食事の最後のコースで一般的にチーズ、甘味の菓子類、果物などを言う」と定義されています。

そもそもマナの家での夕食のデザートとして位置づけて供したものではありませんでした。何年前かに気まぐれに出した寒天で作った食後の甘味の口直しが、いつの間にか日曜夕食のデザートとしてメニューの一端に加えるようになったのが始まりです。

デザートと言っても想像されるような美しく素敵なものではなく、食後の胃に負担が少なくないようにと思い、主に寒天（食物繊維）やゼラチン（動物性蛋白質コラーゲン）を利用しています。マンネリ化を思い、交互に菓子風の品も入れます。母親をしていた時期に身につけたおやつ、手ほどきを受けて覚えてきたものなどが基になっていますが、皆さんに歓迎されているかは疑問です。お店には選り取り見取りで好みのスイーツを求めることが出来ます。が、「時には手作りの冴えないスイーツも」と思うことにしています。料理をすることは楽しい作業です。特にお菓子作りはレシピ通りに行えば失敗はありませんが、途中

にアレンジを加えたりで出来上がりに不安と期待の刺激もありで心動かされる作業です。

デザートには忘れられないことがあります。美味しいプレートに置かれた上部をカットしてクリームを詰めたシュークリームが出来ました。初めての、このタイプのシュークリームを前にナイフとフォークでどのように処理していただければ良いのか、クリームははみ出し、皮がポロポロに碎けるので悲惨なことになり恥ずかしい思いをした若い頃の苦い思い出を持っています。

マナの家の庭に一本の夏ミカンの木があります。毎年十数個の実をつけます。夏ミカンは手作りのピールやジャム作りにもってこいの食材です。今年もたわわに実った果実は職員の方の手に依り美味なジャムソースに仕上がっています。パンのお供だけではなく、さまざまなデザートの間に加わって楽しんでもらえるのではと思っています。



美しく美味しいデザート！
(利用者、職員の声)

婦人保護施設 望みの門学園

良い羊飼い



園長 田尻 隆

「あれっ！ない。」仕事が終わりに職場の最寄り駅へ向かう車中、スマホがない事に気が付いた。さてどうする。どうせ机の上に出っばなしにしたのだろう。このまま明日の出勤までスマホなしで済みますか。いや、おサイフケータイや銀行の振り込みサービス等便利機能持たせてしまったが故、手元がないと不安が募る。もちろんロックをかけているが万が一の恐ろしい妄想が湧いてくる。よし戻ろう。Uターンして机の上を見渡すがどこにもない。えっ、どうして……。もしかして誰かが、私の机の上から持ち去ったのか？もしかして誰かが、知らない書類と一緒にシュレッダーにかけてしまったのか？だんだん妄想が暴走し始める。数十分後、無事に車のシートに窮屈そうに挟まっていたスマホを発見した。

さて、私たちは突然降りかかる出来事に冷静に対応できず、他人のせいにしてみたり、ありもしないことに恐れを感じたり、我を忘れて平常心でいられなくなります。人はそれぞれに凹みや歪み、欠けや裂け、翳りや裏れ、ひびや削げを抱えているのです。そんな私たち望みの門学園に二〇二二年の年間標語が与

えられました。「私は良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」(新約ヨハネによる福音書一〇章十一節)です。

イエスさまは多くの悩める人、悲しんでいる人、病める人に出会い、「飼い主のない羊のようだ」と仰いました。私たちにも羊飼いが必要です。私たちは「自分の道は自分で決める」とか「自分の身は自分で守る」とか「人の世話にならなくても独りで生きていく」と口にします。けれども私たちは誰かのおかげで生かされているのです。靴磨きや歯磨きの「磨く」とは物と物がこすれ合って奇麗なつやが出てくることを言います。私たちも人と出会い、こすれ合っていくことで自身が磨かれていくのです。では私たちは人の悩みや苦しみ、悲しみにどこまで関わるのでしょうか。ある程度は理解し同情しますが、結局背負いきれなくなりま。そんな簡単にシエアできるものではない。そこまでの深い憐れみを持つことが出来るのは神さまの他にないと聖書は語ります。



私たちは神さまのような深い憐れみをもって生きることができません。私たちはいつも他者の罪が許せなかったり、他者のことよりも自分のことを優先して生きてしまう弱さを持っていきます。しかし私たちが神さまのような憐れみを持つことが出来なくても、神さまがその憐れみを持って下さった。イエスさまが私たちの良い羊飼いとなってくださる。そこにこそ私たちの救い、望みがあるのです。望みの門学園の一人ひとりが神さまの良い羊となり、神さまのお導きに全てを委ね、祈りつつ、尋ねつつ今年も共に歩んでまいりたいと思います。

養護老人ホーム 望みの門楽生園 楽生園で働きたいから…

支援員 萩原 悦子

私は、子供の頃から『お祖父ちゃん・お祖母ちゃん』と接触したことがありますでした。今、お世話になっている楽生園の利用者様が私にとっての『お祖父ちゃん・お祖母ちゃん』であり、又お父さんお母さんでもあります。私は、感情表現が上手くありませんが心が心から今この人に対してこういうことをしてあげたいという自分の出来る精一杯のことを日々ささやかだけでもしています。

私も井本常務と同様に目に見えないもの存在を信じています。何故だか子供の頃から白黒つけられませんでした。

私は、一人の人間の気持ちには十人十色という言葉があるように一つの見方をするのではなく色々な角度から、その人を理解してあげようと何故か思っていました。

自分が心から相手に接していれば自然と人は温かい人のところに集まる。これが、私の信念でありこれからも続けていきたいことです。その時から私と福祉は繋がっていたのかもかもしれません。

もし、自分が目の見えない人だったら、そして一人で生活しなければならぬとしたら…。どんな風に動けばいいのだろうか。実際に目をつぶってお風呂に入り、何が何処にあつてという風に手探りでシャワーを出し頭と身体を洗ってみるなんてことをしてみました。

そしたら気付いたのです、一つ一つ小さなことだけで言葉にして伝える。説明すれば相手に理解してもらえ。自分が体験しているからこそ言える言葉。つまり介護とは思いやりの心で出来上がっているものだと。今後も楽生園の利用者様の為に働いていくこと、尽くすこと、笑顔で仕事が出来るようにすること、この三つを忘れずにこれからも頑張っていきたいと思えます。

特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘

コロナ禍の中で

看護員 鷲尾 紀子

コロナ禍の中で開催された冬季オリンピックも幾つかの波乱がありました。日本は過去最多の十八個のメダルを獲得し閉幕しました。私は同郷であるハーフパイプの平野歩夢選手に注目していました。見事な技で金メダルに輝き感動致しました。

さて、私がおぞみ会に入職してから六年、紫苑荘へ異動してから早いもので、一年が経過しました。慣れるまで戸惑う事も多く、不安でいっぱいでしたが、皆さんのご指導の下ようやく少し慣れてきたところです。

冬の晴れた日には紫苑荘の三階の窓から雪化粧した富士山を見ることができ、入所者様と一緒に見て、癒しと元気を貰っています。

そして、コロナ禍での生活も二年、制限の多い毎日にストレスを感じておられるのではないのでしょうか。

入所されている方々も、なかなか家族と会えなかったり、外出も出来ない日常を強いられています。私も実家が遠方の為二年間帰省できず、昨年末のコロナ感染者数がやや落ち着き規制緩和になった時に帰省でき、久しぶりに両親の姿を見ることが出来

ました。二人共に九十歳を超えていますが、元気でいてくれることに感謝です。

現在はコロナの第六波に突入しており、当初は無症状だった軽症で済むような報道もありましたが、今では、いきなり重症化する事例が増えているようです。紫苑荘では、インフルエンザ・コロナ感染者は出ていません。

これもひとえに、入所者のご家族様や職員の皆様の努力とご協力のおかげと感謝いたします。

今後とも感染症対策をしっかり行い、コロナウイルス感染症が「収束」し、やがて「終息」に向かう事を願います。



特別養護老人ホーム 望みの門富士見の里 コロナ禍に於いて自分が出る事

調理員 忍足 直人

新型コロナウイルスの影響により、当施設も外出の自粛、面会の制限、イベントの縮小等影響が続いております。利用者様の楽しみが減って

いる状況ではありますが、厨房では食事でも喜んで頂けるように、月一回の行事食を初め、不定期の手作りおやつ提供、隣接された畑で採れた旬野菜を使った料理の提供など日々取り組んでおります。

私自身が昨年度から取り組み始めたのが、誕生会の「手作りケーキの提供」です。誕生会とは、一階多床室、二階は各ユニットで誕生月の利用者様をお祝いする月一回の施設内イベントです。通常は既製品のカットケーキと紅茶などのお飲み物をお出ししていますが、「より楽しんで頂く為に出来る限りの事をした」との思いで、ユニットの利用者様限定ではありますが、ワンホールのケーキを作る事に挑戦しました。

四月の年度初めから取り組み始め一年。ケーキの定番ショートケーキを初め、抹茶ケーキ、桃のケーキ、十月のハロウィンにはかぼちゃのケーキ等、旬のフルーツを中心に季節のイベントを考慮したケーキ作りを心がけています。(※写真は十月のかぼちゃのケーキです)利用者様の召し上がっている様子を拝見したい所ではありますが、感染対策の一環により、利用者様と接触する事を避けていますので、残念ながらその思いは叶いませんが、介護員さんからの「喜んでましたよ」「食べっぷりがいつもの(既製品)と違った」等の報告により、作って良かった、企画して

良かったと実感しています。

この企画は、共に働いている厨房職員や、誕生会を開いている介護職員の方々の協力があったからこそ実現する事が出来ました。皆さんの協力に感謝しつつ、この企画がより良い物となる様に、今後とも続けて行きたいと思っております。



新型コロナが流行し二年、一刻も早く終息し、利用者様が安心して楽しんで頂けるような環境になる事を心から願っております。

老人デイサービス事業 望みの門デイサービスセンター

人という財産

センター長 山口 寿美子

昨年十一月、婦人保健施設望みの門学園から望みの門デイサービスセンターへ異動となり五ヶ月が過ぎました。学園での働きを通じて様々な人と出会い、様々な人生に関わってきたことは私にとってとても大きな財産を頂いたのだと思える十四年間でした。

福祉に関わる仕事をさせて頂いていましてが高齢者、介護とは無縁であり未知の世界への期待感より不安感の方が大部分を占めておりました。デイサービス(通所介護)は地域で生活する要支援、要介護の方々に可能な限り居宅において自立した生活を営むことができるようADLの維持向上、利用者の社会的孤立感の解消、心身の機能維持やご家族の精神的負担の軽減を図ることを目的としてリハビリ、食事、入浴を提供する施設です。字面で表すのは容易いことですが、これを理解し自身の言動の一部とする努力が必要となり介護員や相談員の仕事を手本とし「デイサービスとしての仕事」を学びました。

利用者の方々は人生の大先輩であり、生活歴や心身の状態も様々で、そんな状況を理解したうえで支援に当たらなければなりません。利用者様は地域からいらっしゃる方であり、地元ならではの習慣や方言もあり、それが職員一人一人の個性も相まって巧みな話術で利用者様に



対する姿勢は頭が下がる思いでした。職場を見渡すと職員と利用者様の話が聞こえてきます。寄り添う姿も目にします。人と人との繋がりは、場所が変わっても「人と関わることへの責任」は変わるはずもなく、何事にも奢らず、真摯に向き合う

ことがとても大事だと思えます。学園で経験した「人と関わることへの責任」はとても大きな財産として私の中に残りました。

そしてそのものは、デイサービスにおいても大きな意味で私の力になると信じています。

望みの門本館の南西に小さな小さなデイサービスの花壇があります。旧デイサービス玄関前にあった木のオブジェのような看板を花壇に立てかけました。殺風景だった花壇に二月の中頃、学園職員に手伝ってもらい菜の花を植えました。黄色い花が咲く暖かい春の日和を楽しみに待ちたいと思います。

今後も人生の大先輩である利用者様の個性と人格を尊重し、ニーズに沿った支援をさせて頂き地元根付くデイサービスを育てていきたいと思っております。



居宅介護支援事業者 望みの門在宅サービスセンター 頼れる事業所になりたい

管理者 立和名 康代

コロナ感染症の収束しない状況の中、利用者様の不安を煽る事が無いように感染対策を徹底・感染予防しながら業務にあたっています。外出の機会が減り自宅で過ごす時間が増える事で、訪問すると「口を開けば主人と喧嘩になってしまう。」と泣いてしまう利用者様の背中をさすることもあります。実は居宅のケアマネは、利用者様の話を聞くよりもご家族の話を聞く方が多い時があります。認知症や要介護度の高い方ほど、そういった傾向があります。そうすると、ケアプラン自体が本人の意向からそれて家族の都合になりがちです。例えば、まだまだ在宅で生活できるにも関わらず、ご家族が音を立ててしまったり施設を勧めたり、ご本人はデイサービスに行きたいのにお金が勿体ないという理由で行かせてもらえなかったり。実際のところは、生活全般のフォローをしたり利用者様のご家族の不満やストレスを解消するべく奔走したり、事業所側のクレームに頭を下げたり、反対に利用者様から事業所へのクレームに対応したりなだめたり…。本来の業務以外で振り回される事も多く、その辺りがケアマネは大変と

言われる所だと思えます。ケアマネは介護保険の専門家です。利用者様から「この人に聞けば、何でも答えてくれる」と思われたいといけませんし、事業所からくる質問にも滞りなく答え、適切な司令塔にならなければいけません。しかしながら、移り変わりの激しい介護保険に対して全て即答できるわけではありません。分からない事ももちろんありますし、理解しているつもりでも「これで合っているのか」と不安になることもあります。私は見栄を張らずに「時間をください」と素直に伝えて役所に聞いたり、同僚と知恵を出し合い、調べ直す等して正しい答えを返答するよう心掛けています。これからも勉強しながらの毎日ですが地元の頼れる存在になりたいと思っています。



居宅老人介護 望みの門ホームヘルプサービス ヘルパー紹介

管理者 久保田 地香

新年度号ということで、今回は望みの門ホームヘルプサービスのヘルパーを少しだけ



紹介させていただきます。

TCさん…のぞみ会数十年のベテラン介護員。身体介護をやらせれば右に出るものはない凄腕介護員、兼現場監督。

KMさん…四十五分の調理支援で五品のおかずを作る、富津の味もばっちりの調理の達人。頭の回転も速く、記憶力抜群の才女。

WHさん…持ち前の明るさで利用者さんの人氣者の元ギャル(根は超真面目)。施設経験十年以上で介護力もばっちり。

NKさん…病気知らず、数年間無欠勤の鋼のボディの持ち主。とても丁寧で速い掃除のスペシャリスト。

ACさん…コーラスにトレーニング、体操教室にも通うホームヘルプサービスのいちばんおねえさん。利用者さんと一緒に歌を歌うこともしばしば。

MHさん…仕事が早いホームヘルプサービスの若手のホープ。利用者さんの様子も見逃さず、気づかいができる介護員。

EMさん…訪問介護の「オールラウンドプレーヤー」とはEさんのこと。富津在住も長いが実は名古屋嬢。お裁縫が得意。

OEさん…話し上手で聞き上手。ヘルパーや利用者さん、公私ともにみんなの頼れる存在。フラワーアレンジメントやハーバリウムが趣味。

YKさん…本人曰く人見知り、しかし人から



の印象は元気印お姉さん。手先が器用で折り紙はプロ級。お庭の手入れも大好き。KYさん…いつも笑顔を絶やさない、癒し系の働き者。利用者さんのファンも数知れず…

SMさん…ホームヘルプサービスの新顔さん、しかし介護員歴は事業所一・二位を競うベテランさん。

そして体だけは大きな管理者KCを含めて、望みの門ホームヘルプサービスは十一名のヘルパーで活動しております。今年度もこのメンバーでスタート。皆様のお宅に訪問させていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

変化に就いて



就労継続支援事業 望みの門新生舎

施設長 森 和浩

見慣れた芝生の庭に一面のフェンスが張られ、パワーショベルが二台三台と搬入されていきます。茂っていた樹木が伐採され、一ヶ月もしない間に一面の更地。ここで家族会や利用者の皆さんと毎年開催していた納涼祭。芝生の木陰はバーベキュー会場として最適で、炭火で火照った身体には一時の涼しさを与えてくれ、昼休みには利用者さんの休憩に大活躍、ベンチで寛ぐ姿も多くありました。また、畑には夏野菜、ビニールハウスにはパンジーや日々草など年間を通して利用者の働く姿があったのをいつい思い出します。

これまでは法人本部から道一本隔て、どこか単一施設の様なのどかさがあったところから、近代的で整然とした施設を感じさせる構えになったように思います。利用者さんの作業風景も大きく変わり、窓掃除や環境整備、洗車が主体で、「できた！実った！」という利用者さんにも理解しやすい成功体験があまり感じられない作業種となってしまう、どこかセカセカした常に完成した形を求められている様でなりません。とは言え、この与えられた環境を否定するものではなく、この環境

に合わせた望みの門新生舎の取り組みとして新しいものを作り上げていくのは私たち職員に課せられた使命でもありません。二〇二一年十月に本館が本格的に稼働し、併せて望みの門新生舎も新しい作

業種を導入し利用者さんの活躍が始まりました。窓掃除ロボットを操り遙か天井高くまで綺麗に仕上げるのは機械とはいえないかなかのもの。操作する利用者もゲーム感覚のようにとっても楽しそうに取り組んでいます。洗車場も整備して水が跳ね上がらない碎石舗装。中庭近くで作業するので多くの職員が見守れるというメリットもあり、効率的な作業が進められています。そして、本館ができて大きく変わったのが職員数の多さ。公用車も含めて七十台前後が毎日行き来する中、ペーカリーののぼり旗がロータリーにはためき、店頭へのお客様が増えたのはとても嬉しいことと



なりました。「お掃除頑張っ！」「美味しいからまた買いに来たの！」「綺麗になったね！」と今までにはない声が利用者さんにかける姿が毎日あります。旗係・洗車担当・窓掃除担当・緑地管理担当とそれぞれに役割や担当を設け、自分たちが主体になって作業をするまでに至ったのはこれまでにはない利用者さんの表情です。新しい取り組みを始めて半年あまりですが、「作業に行ってください！」「終わりました！」と元気に挨拶や報告に来る利用者さんの姿には自分の仕事としての誇りや嬉しさが感じ取れます。

法人設立六十周年を迎える今年、これまでの沢山の思い出を大切にしつつ、利用者さんが主体的に取り組める環境や場面を工夫し整え、いつもキラキラ光る場所にしたいと改めて考えます。

共同生活援助事業 グレースホーム 新たなスタート



施設長 白鳥 尋子

昨年、本館の敷地にあった第二グレースホームの建物は老朽化に伴い解体となりました。思い出がたくさん詰まった一軒家。解体の朝、屋根が剥がされる状況を見て大きな声で「やめて〜！」と叫んだ利用者。足を



第2 グレースホーム (旧ハイム) 前にて
東京パラリンピック記念

ちよっとだけ止めて、涙ぐんでいる利用者とその状況を眺めながら「建物にありがとうだね」と話をして新生舎に向かったことを覚えております。

十二月、有料老人ホームハイムが廃止。職員住宅となった建物が第二グレースホームの新居となりました。高齢化となりうるグレースホームには有難く、日当たりのよい広いお部屋、すべてバリアフリーでエレベーター付き。六十五歳以上の女性利用者五名に声をかけ入居に同意して頂くと共に、他の女性利用者も部屋替えの説明をしたうえで同意、丸一日かけて一齐に引越を行い、一月より新たなメンバーでの生活がスタートしました。気分

転換になった利用者や以前のメンバーを思い寂しくなる利用者、担当職員の入替えもあり、利用者の思いや不安は様々なようでした。そのうえコロナ感染症対策の為の制限などにより、落ち着かない生活が二〜三か月続きましたが大きな事故やトラブルもなく四月の桜の時期を迎えることができました。最近では「コロナはいつ終わるの？」「買い物まだ行けない？」「旅行行けるかな？」と、一時間かかっていた質問がまた復活。引越後ようやく落ち着きを取り戻したからでしょうね。それと共に感染症予防の制限に対しストレスが溜まってきた証拠です。

「今年こそは行きたいね！」約束ができないのが残念。

重度化による行動障害や高齢化の問題など今後増々深刻になると思われますが、健康管理を重視しつつ利用者が住みやすく楽しみのある生活が提供できるよう二〇二二年度も利用者を中心に考え実行していきます。

千葉県中核地域生活支援センター 君津くらしネット はい、生活自立支援センターです！

相談支援員 磯貝 香里

令和三年四月に入職し、君津市役所一階にある生活自立支援センターきみつで勤務して



います。「生活困窮者自立支援」と言うとは難しく聞こえますが、離職や減収で経済的に困窮している方や、家族が引きこもっている方、仕事が続かない方や、ずっと働いていなくて社会に出る事に不安がある方などの相談支援を行っています。コロナ禍という事もあり、離職で家賃の支払が出来ない方や、就労に関する相談が多くあります。また、精神疾患の方や、障がいのある方、高齢者からの相談も多く、様々な課題を抱えている相談者が、毎日のように入れ替わり立ち代わり来所しています。また、生理用品の無料配布や、君津社協独自のフードバンク事業と連携し食料支援を必要とされる方への提供なども行っています。相談者の自宅に訪問したり、手続きや通院、ハローワークに同行することもあり、多忙な毎日をご過ごしています。

「生活困窮者自立支援法」で言う「生活困窮者」とは、就労の状況、心身の状況、地域

社会との関係、その他の事情により現に経済的に困窮し、最低限度の生活を維持することができなくなるおそれのある者、となっております。「困り事」とは本来に人それぞれで、他人から見ても困難な状況にあると思える人でも、「誰かに相談する、繋がる、支援を受ける」という術さえも知らずに、抱えたまま孤立している人もいます。

私はまだ相談支援を始めたばかりですが、センターの先輩方を見ていて、支援に必要な視点、相談者との関わり方など、日々勉強になることばかりです。私達の仕事は、長い時間をかけて相談者と向き合い、相談者の感じる生きづらさに寄り添いながら、一緒に課題に取り組んでいく「伴走型」の支援です。相談者の視点で困り事や生きづらさを理解し、支援から離れた時の自立に向けて、相談者が主体となって課題に取り組むことができるように、そんな支援を目指して頑張っている毎日です。



看護員 井上 昭子

令和四年現在、日本には一〇〇歳以上の高齢者が八六、五〇〇人程おり、高齢化率は世

界トップ。一〇〇歳を超える方が毎月、約四五〇人ずつ増えています。

そんな中、富津市では新たな取り組みとしてフレイルサポーターを養成しました。

東京大学高齢社会総合研究機構の指導のもと、フレイル（虚弱）予防のための簡易的なチェック（測定）を実施することがその役割となり、一般市民を被験者とし筋肉量や嚥下機能等五種類のチェック項目の計測を行い、先日最終講座が行われ富津市にフレイルサポーターが誕生しました。

東京大学高齢社会総合研究機構の研究によると、友達がいる人は長生きでき、定期的に外出をしている人は認知症のリスクが三倍下がることがわかっています。

健康長寿の三つの柱は栄養・運動・社会参加で、生活習慣病より大きく健康寿命に関わっていることが明らかになっています。

この簡易チェックにより被験者は自己の気づき、サポーターは役割を持つことで生きがいを感じる事ができているそうです。

住民主体の市民の手による市民のためのフレイル予防プログラムにより、健康寿命を延ばし、高齢でも自分らしく暮らせることが期待されます。



児童養護施設 望みの門かずさの里 新年度に向けて

副施設長 荒井 久美

開設十六年目を迎え、里の歩みを振り返りながら、今後の体制について考えなければならぬ課題がたくさんあると感じています。開設当初は大舎制で皆が施行錯誤で生活を作り上げていました。子ども一人ひとりよりも里全体として何ができるか、何をしていくか、皆で考えていたと思います。暮らしとして成り立ってきた五年目に、家庭的な養育を目指し、小規模グループケアを始めています。現在は、子ども三十三名がユニットに分かれて生活をしています。子どもが抱えている問題特性に、より個別対応が求められると考えると、人員ギリギリで七ユニットに分けて勤務シフトを組んでいます。個を大事にする体制を重視したのです。しかし、厳しい勤務体制によってか、職員間のサポート体制が弱かったためか、個々の事情もありつつ、結果的に離職者が多く出たように感じています。子どもたちの日々の暮らしの中で見守る職員が頻繁に変わるといことは、子ども・職員が頻りに変わるというよりは、子ども・職員共々にかんがりの心理的負担がかかります。

児童養護の仕事は頑張れば頑張るほど、ボランティアの勤務が増えてきます。幼児・小

学生・中学生・高校生、それぞれの学校対応、生活支援（洗濯・掃除・食事・入浴・就寝・学習支援）進路、家庭支援、児童相談所との連携、医療、等々多種多様な仕事に追われています。加えて、かずさの里は特化して障がい（知的・発達）を抱える児童への支援を行っています。課題の多い子どもたちの支援をするには、時間も人も今の数倍必要と感じます。これまで個別・少人数体制を意識して取り組んできましたが、今の職員の勤務状況を考えると、見直す必要があると思っています。職員が気持ちにゆとりを持って、充実した生活を送っていなければ、子どもたちへのより良い支援はできないと考えます。現状としては、「職員間のサポート体制の弱さ」が一番の課題です。職員がユニットごとに分かれて勤務することで、ユニット内、また全体での支援の共有がしづらくなっています。人材育成の面でも一人に対応する場面が多く、他職員との意見交換をもとに実践する機会が減っています。また、情勢的にも小規模化が推進され、各施設で地域小規模児童養護施設や分園型小規模グループケアの開設・検討がなされています。しかし、どこでも人材不足が叫ばれており、「職員の確保、職員の育成・研修」がやはり大きな課題となっているようです。

コロナ禍で職員も子どもも生活自体がマンネリ化しつつあります。変化や刺激の少ない生活にストレスを感じています。新年度は「新しい風」が必要だと考えます。職員確保に向けての新しい考え方、人材育成のための取り組み、そして「職員が居心地よく安心して働ける職場作り」を目標にしたいです。勤務体制の見直し、内部研修の充実を図り、誰もが意見し合えるチームとしての専門性（人間性）を磨いていきたいと考えます。職員が変わると子どもたちの生活も変わると思いますが、現状に甘んじず、子どもにとっても職員にとっても、より安心安全な生活空間を作っていくしたいと思います。



乳児院 望みの門方舟乳児園

私と乳児園

保育士 富士本 唯

私が方舟乳児園で働きだして、もうすぐ十三年になります。その間、たくさんの子供たちとの出会いがありました。当たり前のことですが、一人ひとり個性がありその子どもにあった関りをしてきました。その中でも関りの難しさを感じる事もありました。そのたびに、職員で関わり方を考え、また色々な経験をもとに関わってきました。現在も、難しいなと感じる子どももいて、日々奮闘しています。特に食事場面での関りが難しく、ちょっとした刺激で食事に集中する事ができず、また切り替えに時間がかかってしまいます。職員間で統一した関りが出来るよう配慮し、情報共有をしています。もちろん職員との関係性もあり、毎日同じではないので、昨日



うまくできて今日もうまく出来なかった事もあり、毎日試行錯誤しながら関わっています。

また、この二月より家庭支援相談員を任せていただきました。勉強不足で分からないことも多く児童相談所との連絡や入退所の対応なども、ただ

ただしく行っています。なかでも現場で実際に子どもたちを見てい



ないもどかしさも感じています。ですが、互いに子どもにとってベストな方法を考えて情報共有をしてケースワークをしていきたいと思っています。子どもにとって大事な時期だからこそ、妥協せず児童相談所とも意見を出し合っていきたいと思っています。

これからも、たくさんのお出会いがあると思いますが、子どもにとってベストな関りが出るよう今後も、努めていきたいと思っています。

児童家庭支援センター 望みの門ピーターパンの家

家庭

心理相談員 齋藤 美紀

「うちとこ、ちょっと変わっているやろ。お母ちゃんが回転焼き焼いて、お父ちゃんはお母ちゃんに仕事してへん」

これは連続テレビ小説『カムカムエヴリバディ』の娘ひなた十歳のセリフです。ドラマを知らない方にも簡単に説明させていただきます。ヒロインの雫真るいはトランペッターの大月錠一郎と婚約しますが、ジョーが原因不明の病によりトランペッターが吹けなくなってしまう。紆余曲折あって、二人は結婚、いはいは回転焼き屋「大月」を始め生計を立て始めます。娘ひなたが生まれて、三人家族になりますが、ジョーは働かず毎日ぶらぶら。SN

Sでは、「ジョー無職で十年か」「働いて」「店番ぐらいできるようになって」とのコメントで溢れました。私もその一人です。家計は大丈夫なのかと心配になりましたが、特に何の問題も起きずに過ぎ去ってしまっただけ、やや拍子抜けでした。

もし、るいが「働いてよ」とジョーに強い口調で言っていたら、娘ひなたは働かない父を軽蔑するようになっていたのだと思います。しかし、るいはジョーを責めなかった。ジョーにはジョーにしかできない、大月家の中で役割があるからではないかと私は思います。それは、るいとひなたを見守るという役割です。子育てを「手伝う」のではなく、一緒に子どものことを考えるジョーの存在が、るいを支えてくれているのだと思います。それは、るいにとって、ジョーが働くことよりも価値のあることなのではないかと私は思いました。



望みの門ピーターパンの家では、子どものいる家庭の相談をお聞きしています。皆さんの家庭はどんな家庭でしょうか。働き方、家事の分担、子どもの人数など、家庭によってみんな違うと思います。夫婦、親子であっても、他人。価値観や感覚がびったり一緒になることはありません。みんなハッピーになれる方法があれば一番だけど、人によってやり方が違うため難しい。私がこの仕事をしていて思うことは、子どものハッピーだけを考えても子どもはハッピーにならないということだと思います。どうしたら、家族みんなが今よりもハッピーになれるか、一緒に考えさせてください。最後に、「ハッピー」って言うだけで、ちょっとだけ楽しい気持ちになれるのは私だけでしょうか。

児童心理治療施設 望みの門木下記念学園
七転び八起き



施設長 佐京 正範

木下記念学園は今年七年目、私も着任し三年目を迎えます。初年度九名で終えた施設が今や二十四名。感慨深い面がある一方、やるほどに奥深さを噛み締めます。

初年度から通じて今もお職員へ伝えていくこと。試行を恐れるなかれ。



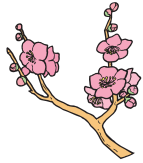
指示を待つ職員では進まない世界。それが児童心理治療施設という福祉現場だと認識せねばなりません。車道センターラインを歩いていた子、冷蔵庫を押し倒した子、エアコンを丸裸にした子、壁に1m以上の穴を複数開けた子、職員の目を箸で刺そうとする子…。わーっ！と叫び逃げ出したくなるのが現場で起きています。開設時から残っている職員は二十九名中四名のみ。何とかしたい一心で

向き合う内にいつの間にか自分の心が折れている。胆力、気力だけではやりきれない現場です。

毎日のように起こる「出来事」への対処やその後のフォロー、これは間を置かず即断しなくてはなりません。でも対応できる職員がない。職員間の合い言葉のようになっていないか、省みなければ。目の前で起きていることを七年目だろうが新卒だろうが対応してみる。失敗した…。それで良い。それが良い。

「失敗は成功のもと」よりも寧ろ「七転び八起き」が合っているかも知れません。対応した職員を称え感謝し、ミスを助けていくことがこの施設には必須です。起き上がるには周りの声、笑顔、行動の助けが必須です。この人間たるコミュニケーションを肝として、互いに助けを乞い、教えを乞いながら成長していくことを願っています。

難しい施設であることは言うまでもなく、難局だらけ課題だらけです。しかし、県下唯一の誰も歩んでいない道を開拓していくことを誇りとして、前に進むほかありません。今施設にいる職員、これまで関わった転出或いは退職者含め全職員、そして私たちを成長させてくれている子どもたちへ感謝し、新たな年度を七転び八起きで進みたいと思います。



わたしが一番憧れる祈り

チャペル委員 神田 督

「大事を成そうとして、力を与えてほしいと神に求めたのに、慎み深く従順であるようにと弱さを授かった。より偉大なことができるように、健康を求めたのに、よりよきことができるようにと、病弱を与えられた。幸せになるうとして、富を求めたのに、賢明であるようにと、貧困を授かった。世の人々の賞賛を得ようとして、権力を求めたのに、神の前にひざまずくようにと、弱さを授かった。人生を享樂しようとして、あらゆるものを求めたのにあらゆるものを喜べるようにと、生命を授かった。求めたものは一つとして与えられなかったが、願いはすべて聞き届けられた。神の意にそわぬ者であるにもかかわらず、心の中の言い表せない祈りは、すべてかなえられた。

私はあらゆる人々の中で、最も豊かに祝福されたのだ。」

この祈りは【病者の祈り】(ニューヨーク・リハビリテーション研究所の壁に書かれた一患者の詩)として、キリスト教関係者によく知られた祈りです。深く味わいたい。



編集後記

今年のイースターは四月十七日。日本では、まだあまり広まっていないイースターですが、キリスト教圏の国ではキリストの誕生日を祝うクリスマスより大事なイベントとされています。そもそもイースターとは、十字架にかけられて亡くなったキリストが、その三日目に復活したことを祝う「復活祭」です。キリストの「復活」という奇跡によって私たちはどんな時にも希望を失うことなく歩むことができるのです。

私たちは生まれてここのまで誰かに育てられました。夜泣きや突然の病気で右往左往し、私たちを育てるのに多くの成功と失敗が繰り返されました。私たちが今ここに立てているのは育ててくれた人の多くの失敗があったからです。つまり「誰かの失敗は、誰かの成功につながる」のです。

この四月、新たに望みの門をくぐった新入職員の皆さん。これから仕事で数多くの失敗を経験することでしょう。失敗の時、自分を苦しめる出来事としてふてくされてしまうのか、自分を成長させてくれるチャンスだとし、前を向くのか、その違いによって私たちの未来は大きく変わっていくのです。失敗を恐れずに日々の業務にあたりましょう。望みの門をくぐった者は希望のうちに歩み出すことができるのだから。